炎龍道場～師弟の日常と戦い～

フォック・リザハート

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

炎龍道場～師弟の日常と戦い～

【Ｎコード】

Ｎ７００９Ｙ

【作者名】

フォック・リザハート

【あらすじ】

とある世界の道場『炎龍道場』ここには作者であるフォックの作った道場だ、一人の弟子であるホムラとともにフォックは稽古をする。そんなフォックとホムラ、そして仲間達や色んなキャラ達の日常の物語

プロローグ（前書き）

はい！またまた新小説です。

ではどうぞ！

プロローグ

ここはとある世界にある大きな建物…木材を使用した古いように見える建物だ、その入口の看板には『炎龍道場』と書かれていた。この建物は道場らしい…その道場の中を見てみよう

……

「はあ…はあ…」

一人の青年が一匹のモンスターと対峙していた。

まず青年の方は髪がレウスレイヤーと呼ばれる髪型でもみあげが長く横側がところどころに髪が跳ねている特に後ろ髪がものすごく跳ねが激しかった、額には汗が出ている。

もう一方のモンスターは鋭い牙に竜の形の顔に頭には2本の短い角クリーム色のお腹に逞しい両腕と両足、体色はオレンジ色で両翼がある、尻尾には炎が灯っている。さらに首には青いスカーフを巻いていて頭にはゴーグル、腰には剣が鞘に収まっている。

なにやらバトルをしているような感じだ、竜は腰の剣を抜く、刀身は光輝くような輝きをしていた

竜「さて、どうする?」

その竜は喋っていた

青年「はあ…はあ…師匠…」

その青年は対峙しているオレンジの竜を『師匠』と呼んでいる

オレンジの竜は青年に迫る

カキーン！！

青年は自分の剣で防ぐ、リーチが長い剣でまるで刀のようだ…この剣は太刀と呼ばれる武器だ、青年はさらに右手で太刀を持ち、左手から短い赤い刀身の剣を取り出して構えたこれは片手剣と呼ばれる剣だ

青年「くっ！爆ぜろ！炎陣爆華（えんじんばっか）！！」

太刀を使って円を描いて炎の華を散らす、しかしオレンジの竜は背中の翼を使って空を飛んで回避する、そこから剣を構えて攻める、オレンジの竜と剣は金色の炎を纏う

竜「燃えろ！聖炎！闇を切り裂き裁きの炎を与えろ！秘奥義！聖炎（せいえん）！爆裁斬（ばくさいざん）！！」

連続で青年を斬りつけ、最後に振り上げて火柱が青年の足元から吹き出る

青年「ぐわっ！？」

青年は吹っ飛んで壁にぶつかった、だが木製でも壊れることはなかった

青年「いってぇ～さすが師匠ですよ～」

青年は頭をさすり言う

竜「炎陣爆華は動作が守護方陣と同じだから隙がでかいのもあるからタイミングが甘かったね」

師匠と呼ばれたオレンジの竜はそう言う、技の事も把握はしているような感じだ

オレンジの竜の名前はフォック・リザハート、作者でありディセンダーのリザードンというポケモンだ

青年の方はホムラと言う、実は元はモンスターである。そのモンスターとは…火竜と呼ばれているリオレウスというモンスターなのだ

これは実は稽古をしているのだ…ホムラはフォックの事を尊敬している。子供っぽいところもあるが自分を優しくしてくれる…ホムラはそんなフォックに憧れている。術や剣技を使うフォックを

フォック「さて、休憩してから基本技の魔神剣の練習するよ」

ホムラ「はい！」

ホムラは元気よく返事をする

フォック「いつも元気だね、ホムラ君は」

ホムラ「いえ／／／／師匠とこうして稽古つけてくれるのは嬉しいんです／／／／」

ホムラは赤くなる

フォック「まあこうして道場にしたんだからがんばらないとね」

ホムラ「はい／／／／」

こうした日常も二人の日常だ

ただいま午後辺りとなっている

プロローグ（後書き）

今回色んな事情があってそれがきっかけでナエトルさんと話して小説にしました。日常などでほぼ物語じゃないかもしれないですが書いていこうと思います。

ではまた次回

基本（前書き）

ホムラ「師匠～第1話ですね♪」

まあ短いけど行くよ

ホムラ「はい♪／／／／」

基本

ホムラ「はっ！」

俺は師匠に言われた基本特技などの鍛錬をやっている。今やっているのは『魔神剣』の練習だ

俺は太刀と片手剣を使っているが今回は片手剣で魔神剣を１００回も放っている。これがきついんだよな～基本的な特技だけど師匠は『まず基本からやって段々と技を磨こう』と言っていた。基本は大事だと俺は実感した

数時間後

ホムラ「師匠～魔神剣の練習終わりました」

フォック「ご苦労様」

師匠はタオルを持ってきて俺に渡してくれた

ホムラ「師匠、質問あるんですが？」

フォック「どうしたの？」

俺は師匠に質問した

ホムラ「どうして基本の特技とかからやるんですか？」

俺的には自分の技から練習した方がいいと思っているんだよな、そんな師匠は素直に応えてくれた

フォック「そうだね…自分の特技だと色々とコツとかがあるから…で、基本的な技は熟練度を上げて練習すればその技を使いこなすことができる…自分の技は基本技からの熟練度によって使える…だからまず基本技から練習すれば新たな技を覚えることができるし、基本的な特技と特技を組み合わせた技を覚えるようになるんだ」

師匠はそう言ってくれた…なるほど…『魔神剣』は師匠が言うには『基本の特技』で特技から熟練度を上げると自然と別の技へと習得できると言っていた

フォック「『魔神剣』は剣技の基本の特技…そこから双剣士だと魔神剣・双牙などもできるようになる…だから特技からの練習が技を磨くための段階なんだ」

ホムラ「へえ～勉強になります」

俺は師匠が言ったことを頭に入れる…後でメモしよう

フォック「そういえばレウトとかは元気にしてる？」

ホムラ「え？」

レウト…レウトの方そういえば

ホムラ「あいつバイトとかしていますがイマイチなんか元気ないようなんですよ」

あいつ元気なかったからどうしたんだ？

フォック「なるほどね…それじゃあ明日レウトをここに来させて、あいつを元気にさせておかないとね」

笑顔で師匠はそう言う、師匠の笑顔はかわいいな～／／／／子供っぽいから余計かわいく見えるぜコノヤロ～／／／／

ホムラ「わかりました！明日レウト連れて来ますね！／／／／」

さて、レウトを連れてこないとな…俺は師匠にさよならして道場からモンスワールドへと戻った

基本（後書き）

次回、レウト登場です。

ホムラ「最近出ていなかったからな～あいつの活躍もあるってことですか？」

うん、あいつがへこたれていたらやばそうだし（汗）

ホムラ「そうですね、あいつはムードメーカーですし」

ヘタレウス登場（前書き）

さて、今回は奴が久しぶりに登場です。ではどうぞ

ヘタレウス登場

次の日

ホムラ「師匠～連れて来ましたよ～」

俺は朝道場へと出てきた

ホムラ「ほらレウト、中に入るぞ」

道場の入口から一匹の竜が入ってきた

赤い鱗で覆われ、顔は竜らしい顔、逞しい両翼に鋭い爪と牙、火竜と呼ばれる飛竜種のモンスター、リオレウスだ、このリオレウスがレウトだ

レウト「ここか～作者の道場というのは」

レウトが道場を見わたす

フォック「ようこそレウト、よく来たな」

レウト「作者～俺すんげぇ暇でラッシュ達は旅に出るわ俺はバイトとかで色々だし、で？なんで俺呼ばれたの？」

レウトはフォックに呼ばれた理由を聞く

フォック「ああ、お前もここに通ってやろうと思っているがいいか

？」

レウトを道場に通わせるようだった

レウト「マジ！いいのか！」

レウトは嬉しそうだった

フォック「ああ」

レウト「おっしゃあ！じゃあ通うＺＥ☆」

彼らしいテンションとなった

フォック「よし」

ホムラ「やった～これでレウトとも一緒だ！」

ホムラは嬉しそうになる

こうしてレウトを加えた道場は少し活気に満ちた

ヘタレウス登場（後書き）

レウト「みんな！久しぶりだＺＥ☆バトル部で副部長だったリオレウスのレウトだＺＥ☆」

テンション高くなったな～

レウト「おう！だって俺が出ていないというのは寂しいからよ～」

ホムラ「たしかにな！お前と一緒で嬉しいぜ♪」

次回は俺の流派を教えます

聖炎流とレウト人間になる（前書き）

ホムラ「師匠、レウトが人間ってどういうことですか？」

見ればわかるよ

ホムラ「わかりました！それではどうぞ！」

聖炎流とレウト人間になる

レウトを加えて早速稽古を開始した

ホムラ「そういえば師匠」

突然ホムラがフォックに質問する

フォック「何？」

ホムラ「道場でも師匠は何流なのかあるんですか？やっぱ師匠は我流なんですか？」

流儀はそれぞれの剣技などの技の教えがどんなのかだ、我流とは自分で極めた技が我流だ

フォック「まあそれぞれあるけどね、魔神剣とかなどは別の流儀のもあるけど我流でそうなのもあるからね…ほとんど我流だけど、俺のは聖炎流だよ」

ホムラ「聖炎流？」

レウト「我流の間違いなんかじゃないか？」

レウトはそう言うが

フォック「いや、基本的な技は普通の我流だけど教えていない聖炎流はそろそろ教えるつもりなんだ」

ホムラ「へえ～ねえ師匠、俺に聖炎流の技などを教えてください！」

ホムラはお願いする

フォック「まあそれは教えるよ…それじゃあ最初に教える技を教えるね」

フォックは最初に教える技を言う

フォック「まずは基本的な聖炎流特技、聖破剣を教えるよ」

ホムラ「聖破剣？」

一体どんな技なのか

フォック「聖破剣は…こう！」

フォックが剣を振ると光の衝撃波が空中で放たれる

ホムラ・レウト「おお～！！」

二人は拍手する

フォック「これは基本的に蒼破刃と同じ斬撃の衝撃波を放つんだ、ただこれは光を収束させて放たないとできない技…光を集め集中させてそこから一気に放つんだ、属性も光属性だから」

フォックは聖破剣の説明を終えた

ホムラ「光か…」

ホムラは「う～ん」と唸る

レウト「で、作者～俺はどうするんだ？」

レウトは自分はどうするのか聞く

フォック「どうせだから…お前擬人化してみれば？」

レウト「俺が？」

レウトは首をかしげる

レウト「でもいいのか？」

フォック「リオレウスでも人間の姿もホムラ君みたいに経験すればいいし」

ホムラ「大丈夫なんですか？師匠」

ホムラは心配するが

フォック「大丈夫、それじゃあ始めるよ…」

フォックが剣を上に掲げるとレウトの足元から魔方陣が現れた

「うわっ！？」とレウトは驚く

フォック「この者に人の姿となりてここに示せ！」

すると光が道場を包み込む

……

ホムラ「う…」

ホムラが目を開けるとそこにはリオレウスであるレウトの姿はなく、その代わり人の姿をした青年の姿があった

髪は茶色でユクモマゲという髪型をしている。顔は少しとぼけたような顔だが少しイケメンだ、服は赤いTシャツでTシャツにはリオレウスの顔がプリントされていた、下は赤と黒を基準としたジーンズだ

レウト「うおわっ！？俺人間になっちまった！？」

レウトは驚く

ホムラ「マジ！？レウトお前！」

ホムラがレウトに抱きつく

レウト「うおわっ！？ホムラ！？」

ホムラ「お前マジレウトかよこの～♪」

ホムラは嬉しそうだ

レウト「なんか妙に違和感あるな～でもこれで俺も♪」

レウト擬人化完了

フォック「まあレウトは基本練習、ホムラ君は聖破剣の練習ね」

ホムラ「はい！」

レウト「といっても俺人間だから空飛べねぇんじゃ」

レウトは人間になったため空を飛ぶことができない

フォック「あ～お前は少し人間になれるようになってからね」

レウト「まあ人間になっても悪くねぇ～な♪」

レウトは嬉しそうだ

フォック「それじゃあ稽古しよう」

いつもの稽古が始まる

聖炎流とレウト人間になる（後書き）

レウト（人間）「おお～なんかすげぇ～」

ホムラ「レウトがいきいきしてる！？」

まあリオレウスなのに変わりないけどね～

レウト「でも空飛べないのは不便だな～」

まあ戻す方法はちゃんとあるよ

レウト「マジ！」

もちろん

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n7009y/

炎龍道場～師弟の日常と戦い～

2011年11月28日23時58分発行